

2012 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：151 カ国

応募総数：11,857 作品（子どもの部 4,033 作品、若者の部 7,824 作品）

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『予測可能な未来』
エリセイ・ビリュコフ（ベラルーシ）13 歳

<若者の部>

- 『数えられないものを数える』
アンジャリ・シャルカル
（バングラデシュ）21 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『僕の生い立ち』
ルブビエ・アッシール・ヤラムツサ
（ブルキナファソ）11 歳
- 『平和な世界を築くため、子どもたちに発言の機会を』
オーゲンロット・ジェローム
（ウガンダ）12 歳

<若者の部>

- 『希望の未来をつくる』
ステラ・トゥ（米国）18 歳
- 『人類の意図的な進化へ向けて』
オスカル・アルレイ・チャコン・フケネ
（コロンビア）24 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 渡辺 廉（愛媛県）8 歳
- ラッヘル・レンリ・ブルドーム・バン・レイネ
（オランダ）11 歳
- メルシオール・タミシエ＝ファヤール
（米国）12 歳
- 木下 陸（千葉県）14 歳
- 大貫 絵莉子（千葉県）15 歳

<若者の部>

- 竹内 杏子（宮城県）17 歳
- アンディタ・フィルセリー・ウタミ
（インドネシア）20 歳
- シャドラック・オセイ・フリムボン（ガーナ<米
国在住>）20 歳
- 野木 美由紀（宮城県）20 歳
- アニスチャ・ラクマワティ（インドネシア）23 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- ヒラヤ・マルコス（フィリピン）8 歳
- ナダ・サフィーラ
（インドネシア<英国在住>）9 歳
- エウニケ・セティアダーマ（インドネシア）10 歳
- 納谷 デリス 舞弥（大阪府）10 歳
- アヤジャン・ウテゲン（カザフスタン）11 歳

<若者の部>

- シェケイナ・シャンマ・リオン・サンチアゴ
（フィリピン）15 歳
- タニア・グプタ（インド）15 歳
- 神田 愛里紗（宮城県）16 歳
- 河野 朱音（東京都）16 歳
- チャン・フエン・チー（ベトナム）16 歳

- スワサモン・ジャイディ (タイ) 11 歳
- オシン・ブイヤン (バングラデシュ) 12 歳
- キリー・バスセミ (米国) 12 歳
- 山中 佐保 (静岡県) 12 歳
- 浅沼 美尚 (栃木県) 13 歳
- 牛丸 瑛理香 (長野県) 13 歳
- エレイン・ジョイス・アン (フィリピン) 13 歳
- 川田 遥 (千葉県) 13 歳
- キルタス・アイダーナ (カザフスタン) 13 歳
- ジュヒ・サクセーナ (米国) 13 歳
- パリーナ・カルパバ (ベラルーシ) 13 歳
- マデリーン・オウコノー (米国) 13 歳
- アーテム・マリン (ウクライナ) 14 歳
- 岩淵 可奈 (長野県) 14 歳
- 金丸 真帆 (千葉県) 14 歳
- 神尾 恵美 (東京都) 14 歳
- ニール・イーリア・ファティン・ビンティ・アフ
マッド・スブキ (マレーシア) 14 歳
- ムラデナ・ピーバ (オーストリア) 14 歳
- ラウラ・マルセラ・アギレ・マルティネス
(コロンビア) 14 歳
- 小松原 英莉 (東京都) 15 歳
- レイア・クリスティーナ・ディソン
(フィリピン) 16 歳
- ハイメ・コスタ・センテーナ
(スペイン<モロッコ在住>) 17 歳
- 磯村 淑江 (東京都) 18 歳
- ジョセフィーナ・パロル (ドイツ) 19 歳
- 峰尾 光人 (北海道) 19 歳
- イバン・ゲータン・ゲヌエ・ヌビッシー
(カメルーン) 20 歳
- ノーベルト・ゲルマーノ (フィリピン) 20 歳
- パオラ・クルス
(ドミニカ共和国<米国在住>) 20 歳
- ロビー・ソイヤント (インドネシア) 20 歳
- ケビン・ジョージ・バリオス (フィリピン) 21 歳
- シャルマ・サンチット (インド) 21 歳
- ジョシュア・オチエン・ウェーラ (ケニア) 21 歳
- デニサ・サムコバ (スロバキア) 21 歳
- クリスティーナ=エレナ・ペストレア
(ルーマニア) 22 歳
- アヨデジ・オジョ (ナイジェリア) 23 歳
- ベラニカ・ブラシェウスカヤ (ベラルーシ) 23 歳
- ラファエル・ティモテオ・コッロ・ペレス
(メキシコ) 23 歳
- タイウォ・オロガンバ (ナイジェリア) 24 歳
- リリアン・オマフォデッチ (ナイジェリア) 24 歳
- マナス・パンダ (インド) 25 歳

努力賞

<子どもの部>

該当者なし

<若者の部> 8点

- クレア・ウー (ニュージーランド) 16 歳
- チャーリー・レン (米国) 16 歳
- ムハマッド・ハジーク・アブシール・ムハマッド・
ファウジ (マレーシア) 16 歳
- 會田 希望 (埼玉県) 17 歳
- 北島 沙彩 (東京都) 17 歳
- ニジェッシュ・ウブレッティ (ネパール) 17 歳
- ヘスス・アンドレス・ビジャサーナ・アルバレス
(メキシコ) 18 歳

- アドリアーナ・ボルハ・エンリケス
(エクアドル) 21 歳

学校特別賞 (1 校)

- 市川中学校・市川高等学校(千葉県)

学校奨励賞 (26 校)

- 跡見学園中学校高等学校 (東京都)
- 大阪コミュニケーションアート専門学校 (大阪府)
- 橿原市立畝傍中学校 (奈良県)
- 近畿大学附属和歌山中学校 (和歌山県)
- クリーブランド日本語補習校 (米国オハイオ州)
- 国土館中学校 (東京都)
- 志學舎 (東京都)
- シティ・モンテッソーリ・スクール (インド・ラクノウ市)
- 椋山女学園大学附属小学校 (愛知県)
- 中部テネシー日本語補習校 (米国テネシー州)
- 東京学芸大学附属国際中等教育学校 (東京都)
- 不二聖心女子学院 (静岡県)
- 松本秀峰中等教育学校 (長野県)
- 郁文館高等学校・グローバル高等学校 (東京都)
- 大田区立大森第六中学校 (東京都)
- 神河町立神河中学校 (兵庫県)
- 京都学園中学高等学校 (京都府)
- こくご塾 KURU (東京都)
- シカゴ補習授業校 (米国イリノイ州)
- 静岡県立沼津東高等学校 (静岡県)
- 昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校 (東京都)
- セント・メリーズ・インターナショナル・スクール (東京都)
- チューリッヒ日本人学校日本語補習校 (スイス・チューリッヒ市)
- トリド日本人補習校 (米国オハイオ州)
- ポート・オブ・サクラメント補習授業校 (米国カリフォルニア州)
- 宮城県迫桜高等学校 (宮城県)

予測可能な未来

（原文は英語）

エリセイ・ビリュコフ（13 歳）

ベラルーシ・ミンスク市

第 1 中学校

僕は将来について真剣に考えたことはありませんでした。そんな僕が変わったのは、2 カ月前に学校で一人の少女について話を聞いてからです。その子は重い病気、癌にかかっていた。それもかなり進行性の癌でした。ベラルーシの医師たちはできるかぎりのことを尽くしましたが、少女には死が迫っていました。唯一の望みは、ドイツでの治療でした。ドイツに行って治療を受けるためには少なくとも 5 万ユーロのお金がすぐにも必要でした。人の命の代価。ここでは膨大な額です。そこで、ご両親はできるかぎりのところで募金集めを始め、僕たちの学校にも来たのです。今ではこうした話に慣れっこになっていました。というのはチェルノブイ



リの原発事故で、ベラルーシでは子どもの癌発症率が 13 倍にもなったからです。チェルノブイリ発電所はベラルーシの国境近くにあり、事故直後、北に向かって風が吹いていたので、放射能雲が僕たちの方に運ばれてきたのです。ですから、新聞、テレビ、インターネットには癌で死に直面し、緊急に助けを必要としている子どもたちの記事やニュースがよく出ています。

でも、この少女は特別でした。写真を見たらすぐにわかりました。化学療法の副作用で髪の毛が抜け落ち、目がくぼんで顔色がとても悪かったのですが、その子は微笑んでいました。そのまばゆいばかりの微笑みは何なのでしょう。僕は本当に心を打たれました。僕だけではありません。クラスメートのほとんどが翌日募金を持ってきました。そのような状況の中で微笑むことができるなんて、なんて心の強い子なのでしょう。自分が彼女の立場だったらどうだろうと、ちょっと想像してみました。1 日、1 週間、1 カ月のうちに命が消えてしまうかもしれないとわかっているなんて、どんなにか恐ろしいことでしょう。でも少女に恐れている様子はありませんでした。そして、はっと気付いたのです。僕もいつかは死ぬし、人は誰でも死を迎えるのだと。唯一の違いは、少女はそれがまもなくだということを知っているということでした。彼女にとって、死は現実のものでしたが、僕にとっては幻のように真実味のないものでした。それが、自分にも訪れる未来であること、僕たち全員に共通の未来であることに気付いたのです。

算数の宿題をしていたその日、地球上の僕たちの生命は、始まりと終わりがあるので、半直線では

なく、切片ではないかと考えつきました。その切片は、長い人もいれば短い人もいます。いずれにしても時間は限られており、つまらないことに費やしたり、無駄にすることはできません。インターネットのサイトをいろいろ見ているうちに、エリザベス・キューブラー＝ロス博士の『続・死ぬ瞬間―死、それは成長の最終段階』(Death: The Final Stage of Growth) という本に出会いました。その本は、自分がもうすぐ死を迎えることを知っている人たちがどのような変化を遂げるかについてたくさん例を挙げています。そうした人たちは精神的に大きな成長を経験し、いつまでも命があると思いき、人生を謳歌していたときの自分よりも今の自分の方がはるかに幸せであることに気がきます。これは僕についても言えることだと思います。もうすぐ死ぬという意味ではありません。むしろ長生きしたいと思っています。ただ、あの少女の生き方を見て、自分が持っているものに感謝し、それを大切にしようになりました。今では単に長生きするだけでは十分ではなく、聖書にあるように、僕も満ち足りた日々を送りたいと思っています。今では重要なことを優先し、毎日を送るように努めています。僕の周りの人と良い関係を持ち、共に時を過ごし、相手を大切に、その言葉に耳を傾けるようにしています。本当に難しいことですが、こうしたことを優先して日々を過ごすことができれば、予測可能な未来(死)がやって来ても、人生を無駄にしたと思わないですむのではないのでしょうか。

なんという矛盾でしょう。死について考え始めたのをきっかけに、より良い生き方をしようと決心するとは、「メメント・モリ(死を忘れるな)」と言ったローマ人はなんと賢かったのでしょうか。遠い将来、いつの日か書き直すことができる下書き帳のように人生を考えてはいけないということです。清書しかないので。やってしまったことを元に戻すことはできません。そして、やっていないことはやれないままになってしまうかもしれません。正しい行動をとる機会は今であって、将来訪れるものではありません。死は、生への強い意欲を引き出すものです。それは、テロリストが自分の目的を達成するために、人々に植え付けようとしている死の恐怖のことではありません。そうではなく、死を認識することによって、今、この時をより良く生きようという気持ちになるということです。そして、そのことが僕たちのより良い未来につながるのです。

2012 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

数えられないものを数える

（原文は英語）

アンジャリ・シャルカル（21 歳）

バングラデシュ・ダッカ市

ダッカ大学

生まれたとき、私の肌の色はかなり濃く、両親は大変心配したそうです。バングラデシュでは、女の子は肌の色が白いほうが好まれます。親戚や近所の人たちは、私が結婚するときには、父は相手に多額の持参金を積まなければならないだろうとよく言っていたものでした。私はそのような話を聞きながら育ちました。とても悲しく不安で、自分のことを恥ずかしいとさえ思いました。私は幼少期から、あまり美しくない自分の外見を勉強することで埋め合わせようと必死でした。私は一生懸命勉強し、歌や踊りや絵を描くことなど、ありとあらゆることに取り組みました。美しくないという理由で誰も私のことを見下したりできないよう、一番になろうと夢中になって頑張ったのです。



やがて、そうした私の努力が報われ始めました。私の人生に次から次へと成功がもたらされたのです。18 歳のとき、バングラデシュで最も名門とされるビジネススクールに合格し、良い成績を取ろうと私はさらに必死になりました。でも、何かが徐々に変わり始めたのです。子どもの頃、私の世界はとても狭く、学校と家と家族と、数人の友だちだけでした。大学に入り、成果や仕事やお金や社会的地位を欲しがるといって、何百人もの人に出会いました。誇りと地位と名声にあふれた人生を送っている卒業生と話をし、彼らのいわゆる「成功に満ちた」人生を観察してみました。すると驚いたことに、成功したからといって、彼らは必ずしも幸せではないことに気がつきました。心の奥深くで、彼らは精神的に落ち込んでいるようでした。上司を罵ったり、仕事に不満を感じていたり、家族と満ち足りた時間を過ごせなかったりしていたのです。

私は混乱しました。私たちは、人生にいったい何を期待しているのだろうか。明日の未来を作るために、私たちはいま何をすべきなのか。私は、注意深く観察するうち、まわりに明るく前向きな雰囲気欠如していることに気がつきました。不満、不寛容、そして皮肉な考え方が、あらゆるところに蔓延していました。何か間違っていると私は感じました。統計によると、我が国は発展していますが、国民はどうなのだろう。私たちは前より幸せになっているのだろうか。そもそも、私たちは幸せなのか。

私はたくさんの人と話をし、例外的な物事や出来事、大勢とは違う人を見つけようと思いました。

幸せな人生を送り、夢をかなえようと一生懸命に努力し、人を助け、社会に貢献している人を探しました。そして徐々に、私は自分がどのような未来を望んでいるか自覚するに至ったのです。

現代社会に生きる私たちは、物質的な喜びに突き動かされています。お金、持ち物、給料、贅沢品。多くの人にとって、そういったものの方が重要で、ささやかなものの価値を忘れがちです。それは、私たちの人生を真に恵まれたものにしてくれる小さな贈り物です。例えば、健康とか人との関わりとか家族。当たり前なことだと思っていて、意識的に考えたことのないものが、実は人生で最も大切なものなのです。数字とか目に見える物の先に思いを馳せ、自分たちを取り巻いている様々な目に見えない贈り物を大切にしなければなりません。人生を歩んでいくときの指針になるのは、価値観や考え方、夢や愛する人たちであって、食べ物やお金ではありません。

私はビジネススクールの典型的な学生で、巨大な多国籍企業に就職し、月末には多額の給料をもらい、贅沢な生活を送れる日が来るのを待っていました。でも、人生で何が真に大切なものか気付いたとき、大勢に従うのではなく、自分の運命は自分で設計する道を選ぶことにしました。そして、社会起業家になろうと決心し、農村の貧困層に安全な衛生を提供する新規事業を立ち上げました。

私は、人生の小さな恵みに感謝することを覚えたとき、本当の成功を成し遂げるには、競争ではなく、協力すべきであることを理解しました。そして私は、クラスメートや後輩たちにも働きかけ始めました。先生たちに自分の考えを話しました。最初は誰もが、貧しい人のために働きたいという私の考えは、単なる一時的な気まぐれだと一蹴しました。皆が私に忠告し、止めようとし、あざ笑う人すらいました。でも、私は、自分の心に従うことにしました。何を優先すべきか整理し、重要だと思われる小さな事柄を重視することにした今、何ものも私を止め立てすることはできません。自分の心に従うという考えは、特に新しいものではありませんが、私はなぜ多くの人が自分の心に従うことに失敗するのか、自分の経験を通して学びました。私たちはしばしば、一番大切なことの価値に感謝することを忘れ、あまり大切にないものを欲しがります。小さなことが重要なのに、私たちはしばしば、それをないがしろにしてしまうのです。

私はいま 21 歳になりました。心は情熱であふれ、目は自信で輝いています。もう混乱はなく、劣等感もなく、美人コンテストの優勝者になれないことについての心配もありません。私は、社会事業という自分が好きな分野を通じて、自分の国と世界のために何かをする心構えができています。あらゆる社会事業は、人、地球、そして利益を同列に考えます。私は自分の社会事業に携わるのが好きですが、他の起業家が社会事業を設立するための手助けするのは、さらに好きです。そのようにして地域社会の中で幸せは築かれ、広がっていくのです。私は若い少女たちに、いま私がそうしているように、殻から外へ出て世界に目を開こうと呼びかけます。私は自由な鳥。他の鳥たちにも、かごを破って飛び立とうと励ましています。

未来はどこでもない、私たち自身の手の中にあるのです。つまらない物質的な満足感を追いかけるのはもう十分です。数えられないものを数え始めませんか！

僕の生き立ち

(原文はフランス語)

ルブピエ・アッシール・ヤラムッサ (11歳)

ブルキナファソ・ウアガドゥグ市

サン・テグジュペリ・ドゥ・ウアガドゥグ小学校

僕は11歳です。僕は幸運に恵まれています。

僕はアフリカ人です。僕は、コートジボワールの北部にある「ココトン」という美しい響きの名前の小さな村で生まれました。僕は幸運な少年です。赤ん坊の頃、コロゴの孤児院から養子に引き取られました。

僕は幸運で、とても幸せです。何故なら、僕には4人の親がいるからです。僕をこの世に生んでくれた生みの親であるバカリーとイエオ、そして、僕が『愛の親』と呼んでいる育ての親、パパのセルジュとママのアニーです。僕はとても愛されています。僕にはハムザという弟がいます。彼も僕のように養子です。妹もいます。彼女も養子です。モイという名前です。コンゴの言葉で太陽を意味するのですが、彼女にピッタリです。本当の太陽みたいにきれいだからです。

ママは、僕の生き立ちについて何度も話してくれました。僕を生んでくれたお母さんは、出産の2か月後に亡くなりました。まだ若く、たった14歳でした。僕の今の年齢と変わりません。当時、お父さんのバカリーは19歳で伝統的芸術の彫刻家でした。二人は愛し合っていましたので、僕は二人の愛の結晶です。僕は、2000年の10月19日に生まれました。僕はセヌフォ族ですが、家族みんなの出身地が違っているので、僕は世界中に属していると感じています。僕はアフリカ系黒人、パパはヨーロッパ系白人、ママはアンティル諸島系の黒人、弟はアフリカとヨーロッパの混血、妹はアフリカ出身で褐色の肌をしています。

いつも僕はこれらの全てが自分だと感じています。家では、そうした自分たちの違いを共有しているからです。ソースグレンをかけたバナナやオオバコのフトウを食べている時の僕はコートジボワール人です。おじいちゃんやおばあちゃんとノルマンディーにいる時には、ノルマンディー人だと感じます。おばあちゃんがクリームチキンを料理してくれる時は特にそうです。魚のアクラを食べながらママが唄うアンティル諸島の子守歌を聞いていると、僕はマルチニック島人だと感じます。そして、僕は、弟や妹と同じくコンゴ出身なのですが、いろいろな血が混じっていると感じています。僕にとって、世界は白でも黒でもなく、交じり合っているからです。人はみんな違いますが、どこにでも属することができます。特にインターネットのおかげで世界中の人々とコミュニケーションができます。人々は、世界中で出会い、混ざり合っているのです。

僕が今日言いたいことは、僕のような子どもたちが養子に迎えられて、生みの親でなくても、愛情を受けながら成長できるようになってほしいということです。大切なのは、愛情です。僕は、両親や祖父母やおじさんやおばさんたちや兄弟に愛されていて幸せです。

これが僕の家族です。数人ですが、世界そのものです。アフリカ、アンティル諸島、ヨーロッパだけではありません。アジア系のおじさんもいます。みんなが僕たちの違いと個性を尊重しながら、愛情を持って育てようとしてくれていることがわかります。

僕の両親、親類、そして、血のつながった家族、これら全ての人たちを、僕や弟や妹が一つに結び付けているような気がすることがあります。そして、そのことをとても誇りに思います。

僕にとって生きることは、他の人との違いを感じることなく、みんなと共に生きることです。僕は、世界中の全ての子どもたちが、そのように生きられればいいなと思います。そして、家族を失った子どもたちが、愛深い両親の養子になればいいなと思います。僕は、自分の生い立ちを隠そうとしたことはありません。みんなに知ってもらいたいからです。複数の家族からなる、一つの大きな国際的な家族を持っていることは、僕にとって宝であり、僕の誇りなのです。僕は、これからもこうして成長していきたいと思います。弟のハムザと妹のモイ、そして、世界中の子どもたちもそうであってほしいと思います。

秘密を打ち明けます。養子をとることは愛情ある行為です。そして、時には、子どもを手放すことも愛情ある行為なのです。僕の実のお父さんは、貧しすぎて僕を育てることができなかったので、そのままでは、僕は死んでいたかもしれないのです。

僕とママだけの遊びがあります。ママが僕の耳元で「アシル、内緒の話があるの」とささやきます。僕がママに近づくと、ママは「愛してるわよ」とささやきます。確かにママは僕をお腹に宿したことはありませんが、ママはこれからもずっと僕の愛するママです。

僕のような子どもたち全てが、たとえ実の両親のもとでなくても、平和な環境の中で家族の愛情に包まれながら生活し、成長できるよう願っています。そして、彼らがいつでも自分の生い立ちについて、誇りをもって語れ、世界がもっと素晴らしいものになるよう願っています。

平和な世界を築くため、子どもたちに発言の機会を

(原文は英語)

オーゲンロット・ジェローム (12 歳)

ウガンダ・リラ市

リラ・セントラル小学校

僕の名前はオーゲンロット・ジェローム。12 歳、ウガンダのリラにあるリラ・セントラル小学校の 6 年生です。今日の夢は、明日の現実になります。僕は世界を良くしたいので、その実現に一生懸命に取り組んでいます。ベストを尽くし、自分の可能性を発揮し、学校で精一杯頑張れば、実現できると思います。何よりも大切なことは最善を尽くすことです。何事においても、また誰に対しても最善を尽くせば、自分自身のためにも最高の結果を達成できるからです。僕の夢は、自分の国と全世界の平和で繁栄した未来をつくることです。これは、僕がまだ 2 歳だった頃、2002 年に実際に体験したことから得た夢です。

僕とお母さんは、ジョセフ・コニー率いる反政府武装勢力「神の抵抗軍」によって引き起こされた自動車事故に巻き込まれました。僕たちは、小型貨物自動車に乗って出かけていたのですが、2 時間あまり進んだところで反政府勢力の待ち伏せに遭い、発砲されたのです。僕とお母さんは、前の座席に乗っていました。ドライバーはコントロールを失って、車は 2 回横転し、僕はフロントガラスを打ち破って外に放り出されました。信じられないかもしれませんが、本当のことです。お母さんは左腕を撃たれました。僕たちのとなりに乗っていた乗客は即死でした。発砲が終わって、僕とお母さん、そして重傷を負った人たちは病院に運び込まれました。

僕は、国立病院に移されるまで 2 週間近くも昏睡状態が続いていました。国立病院では十分な治療をしてくれましたが、それでも主治医の先生は、僕が助かるとは思っていなかったようです。レントゲンを撮ったところ、頭蓋骨が骨折していたからです。神様がお守りくださったおかげで、僕は死を免れることができました。でも、事故後 1 年間は、先生に経過を診てもらうために病院へ通いました。十分な理学療法を受けて再び歩けるようになりました。これも僕を担当してくれたノルウェーの理学療法士の先生方、フレイディス と エスパランドのおかげです。

今でも右脚と右腕は麻痺していますが、歩くことができ、左手を使って書くことも、そして他に多くのことも自分でできます。嬉しいことに、お母さんも良くなりました。4 歳で保育園に入りましたが、事故で頭蓋骨がひどく損傷を受けたにもかかわらず、脳はひどい影響を受けずにすみ、知力に問題なく勉強できることに感謝しています。この事故のことは 10 歳になったときに教えてもらいました。

この体験は、まったく罪もない人々、特に子どもたちがいかに戦争や国の政情不安の被害者となり

うるかを物語っています。僕は、他の子どもたちに僕と同じような経験はして欲しくありません。そのためには、平和と融和について子どもたちに発言の機会を与えたいと考えています。将来、大きくなったら、平和についてのトーク番組ができるようなラジオやテレビの司会者になりたいです。そうすれば、子どもたちだけでなく、指導者の人たち、できれば大統領も招いて、人々と政治の安定のために平和と融和を築く最善の方法を一緒に話し合うことができます。さらには、僕が今、地域のラジオ局でやっているように、子どもたちが自分の考えを発信し、人々を啓発する子ども番組を始めてみたいのです。世の中には、意見を述べ、人々を啓発するだけの力を持った子どもたちがたくさんいます。でも、彼らを育て、その才能を引き出す人がいないだけなのです。僕はそうした人になりたいです。自分のために何を得ることができるかは別にいいのです。一番大切なことは、僕が世界のために何ができるかです。

僕と同じ子どもたちに言いたいです。お金よりも時間が大切です。時間を賢く使い、自分の夢を信じよう。自分の目標を達成することに一生懸命に取り組み、何事も可能であると神を信じよう。そして、問題に直面したときには、あきらめたり、闘うのをやめたりしないで、問題は必ず克服できると前向きに考えよう。「勝者は決してあきらめないし、あきらめる人は勝者にはなれない」という言葉を忘れずに。他の人にできることは、自分もできるし、もっとうまくできると信じよう、と。

最後になりましたが、積極的に若者に働きかけてくださり、世界の未来をつくる上で僕たちを大切な存在と覚えてくださった、このコンテストの主催者の皆さんに心から感謝します。

希望の未来をつくる

(原文は英語)

ステラ・トゥ (18 歳)

米国イリノイ州

私が思い描くのは、子どもがみな楽器を演奏する未来です。つまらないことに聞こえるかもしれませんが、譜面に書かれた和平条約などこれまでありませんし、世界のリーダーらが即興演奏のために集まったことなどありません。ただ、考えを進めてみると、音楽がより明るい未来の鍵になることに気付きます。音楽の演奏を通じて、これからの世代が直面する社会経済的・地政学的危機に立ち向かう上で重要な価値観やスキルを学べるからです。

音楽を演奏することで、非物質的なものの価値を学ぶことができます。音楽は売買できるものではなく、また所有が限定されるものでもありません。私にとっては、何カ月もの間欲しかったコーチのハンドバッグを手に入れたときよりも、ラフマニノフの協奏曲第 2 番を弾けるようになった方が、はるかに満足感がありました。視点を広げると、世界の文化は主に消費主義が基盤となっています。今では、私たちの抱える問題の多くが、過剰消費に起因しているのです。化石燃料で走る自動車、環境基準の低い国で生産される安価な製品、常にエアコンを効かせている大邸宅。これらは、環境悪化の要因となり、地球上の生命を脅かしています。将来、人々は地球存続のために、こうした危険な CO2 排出を削減すべく、大量消費の欲望を多少抑えざるを得なくなるでしょう。音楽の演奏を学ぶことは、この目標の達成に向けた、小さいけれども重要な一歩になるはずです。

音楽を演奏することで、犠牲や忍耐の心を学ぶこともできます。チェロのリズムセクションをマスターするには何カ月もかかりますし、音楽を創る技能や芸術的才能を身につけるには、一年どころか生涯を通じた努力が必要です。音楽の才能や技術は短期間で簡単に習得できるものではありません。世界を見渡してみると、多くの地球規模の問題は、国々の近視眼的な我欲の追求が原因と言えるのではないのでしょうか。例えば、国際債務危機や現在の深刻な財政赤字は、自制と先見性の欠如を示すものです。私は、各国政府が将来世代に責任を押し付けるのではなく、次世代のために犠牲もいとわないうようになってほしいと願っています。音楽家であれば、大半の人が早い段階で学ぶ教訓です。

音楽を演奏することで、主観性の大切さも学ぶことができます。楽曲一つ一つに、無数の可能性とバリエーションが内在しています。楽曲のストーリーを共有することで、演奏家はその楽曲のさまざまな解釈や視点を探求します。同様に、私たちも、同じ世界について、それぞれ独自の視点や考え方を持っています。歴史を振り返ると、人類は、自分の考えとは違う他の考えに対し、その正当性や価値を尊重できずにきました。21 世紀に入っても、国際社会はイデオロギーの対立に苦しみ、不必要な

殺戮を犯しています。自分とは異なる他者の視点を楽曲の美しい解釈としてとらえることはできないでしょうか。そうすれば、もっとお互いを尊重し合える世界になることでしょうか。

音楽を演奏することで、調和と協調を学ぶこともできます。音楽を通して、演奏家は人と出会い、言葉ではなく、音符を通してコミュニケーションする機会を持ちます。チェコ共和国で行われた室内楽の合宿に参加したことがあります。参加者全員が違う国から来ていました。話す言葉は違っても、私たちには音楽という共通の言葉があります。音楽は、ハーモニー、音符、和音の総和であり、一つ一つの構成要素を超えるものが出来上がります。将来、私たちは、ジェンダーの不平等、貧困の蔓延、世界的流行病の脅威など、今日抱える数々の問題に対峙できるグローバル・コミュニティを構築する必要があります。そのためには、結束するための言葉が必要です。音楽は、それが可能であることを示してくれます。

この夢の実現に向けて、私は、自分が得た賞金を積み立て、若者の芸術表現をサポートするための非営利団体を創設しました。そのスターライト財団で始めた仕事を今後も継続すると決めています。私は財団を通じて、若者の芸術活動や文筆活動を応援してきました。すでに作文コンクールや美術コンクール、展覧会を主催し、将来は音楽の分野も加えたいと考えています。また、資金不足により、音楽の演奏をする機会のない地域の子どもたちに中古の楽器を集めて配布する事業にも、今後、取り組んでいきたいと思っています。スターライト財団では、お金を持つことより、お金を人の役に立てることの方がはるかに大切であると訴えています。人々に音楽を演奏する機会があり、そこから学んだたくさんの教訓を自分のものにすることができれば、地球社会は多くを得ることができ、未来ははるかに可能性あふれるものとなるでしょう。

人類の意図的な進化へ向けて

(原文はスペイン語)

オスカル・アルレイ・チャコン・フケネ (24 歳)

コロンビア・スーサ市

私は、コロンビアのアンデス山脈にある小さな村、スーサの出身である。村の経済は農業と畜産で成り立っている。私の国は悲しいことに悪い意味で世界的に有名で、麻薬の密売、暴力、貧困、汚職が、逃れられない運命のように国中にはびこっている。コロンビア人はみな、そのような悪環境に生まれ育つのである。

都市と隔差のある農村では、問題はさらに根が深くなる。そのため、私の世代の人間はほとんど誰も、農村に未来を見いだせないでいた。むしろ皆、将来、公務員になるか、大きな会社に就職するために、都会へ出て働くか、勉強する道を選んだ。私も実は、同じように考えていた。私たちはお金を稼ぐことに気を取られ、村の問題について一度たりとも考えたことはなかったし、言うまでもなく、若者として、その解決策に取り組む責任があると考えたこともなかった。

農村の指導者である私の父は、農業経営学を勉強するよう私を説得したが、私は、他の学部空きがないという理由でそれを選んだ。しかし、やがて農村部に興味を持つようになり、農家の人たちともっと親しくなりたいと思うようになった。だが、それは簡単なことではなかった。私が大学で学んだことは、地元でのやり方と大きく違っていたからである。私はパソコンを持ち込んで、昔からの民間の知恵を無視して、自分の考え方や技術的な知識を押し付けようとした。しかし、そのうち、私は、地元の人の言うことに耳を傾け、自分の村のかけがえのない伝統の一部になっている民間伝承の方法を貴重なものだと考えはじめた。そして、地元の人たちと会話を重ねるうちに、彼らの考え方や行動を理解するようになった。森や畑に鳥のさえずりや風の音しか聞こえない収穫の夜を幾晩か過ごすうちに、経済学者たちから見れば不合理でしかないこと、つまり、なぜ彼らは金にならないのに耕し続けるのか、その答えが理解できた。それが彼らの生き方、彼らそのものだからである。私たち農夫の体は、母なる大地から生まれたトウモロコシでできているのだ。

私は、彼らの辛抱強さを見習い、土を耕し、種を植え、世話をし、収穫を待つやり方を身につけた。売値がどうであれ、収穫はいつでも神の恵みである。彼らの地域社会では、最も役に立つ人物が常にリーダーシップを発揮する。着ている服の良し悪しではなく、真剣に力を尽くし、貢献するからこそ、その責任に相応しいのである。

このような考えから、私は農村文化を見直し、“ルアナ”や“ソンプレロ”や“アルパルガタス”を身につけて大学へ通い始めた。彼らとは、今では 4 年間一緒に働いており、先頃、私たちは全国 12 の市町

村の一つに選ばれ、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術支援を得て、「一村一品」という日本の村興し運動を導入することになった。私は以前に JICA の奨学金を受けたことがあり、私の進級論文のテーマでもあった今回のイニシアチブのリーダーを務める。

農夫たちが、どんどん自信を取り戻していくのを見ると、人間の可能性には限界がないことを実感する。

進化とは、あらゆる生き物が完璧を目指して登る、果てしなく続く階段のようなものだと私は想像する。人間もまた、絶え間のない変化の中を生きているが、理性というものに恵まれているのだから、種としてどう進化したいか、その方法を選ぶ能力が私たちにはあるはずだ。自然界の他の生き物は、競争的な環境の中で最も強いものが生き残る仕組みになっているが、人間には意識というものがあるため、相手をライバルとしてだけでなくパートナーとして見ることもでき、自分のためだけに戦うのではなく、もっと共同体としての取り組みができるのである。

私たちの次の進化の段階は「兄弟愛」に目覚めることだと私は思う。他の生物の場合、適応は外圧的な要因によって引き起こされるものだが、素晴らしいことに、私たちのこうした変容は計画的に成し遂げることができる、つまり「意図的な進化」ができるのである。

ナショナリズムや所有欲を克服すれば、私たち人間はもっと質素で謙虚な生き方ができ、他者の幸せに奉仕する使命感に生きがいを見いだすことができるはずだ。

「意図的な進化」を達成するには、互いにもっと交流することが必要である。私の場合も、自分の村の農夫たちに耳を傾けていなかったら、職業的に成長できなかつただろう。彼らは、結局、私が彼らに教えるより多くのことを私に教えてくれた。だからこそ私は、互いの仕事を尊重しあい、相手の立場を体験しあえるような世界を夢見る。経営者が庭師になったり、株式仲買人が飛行機を操縦したり、コックが歌手になったり、科学者が農夫になったりしてみるのだ。

個人的なレベルだけでなく、国家間のレベルでもお互いの立場に立ってみることができれば、すべての問題はもはや一国だけで解決しなければならない問題ではなくなり、人類という種全体として取り組むべき課題となるだろう。

若者の一人として、私はその方向へ歩みを進めている。そして、自分の子どもたちのために望む世界は、人類が平和、正義、そして持続可能な道へと進化している世界だ。そこでは、都市の周囲に壁を作る必要はなく、世界の国々を先進国と途上国に分ける必要もないのだ。

ぼくがかんがえるきぼうのみらい

(原文)

渡辺 廉 (8 歳)

愛媛県

今治市立上朝小学校

ぼくが、かんがえるきぼうのみらい。それはせんそうのない、みんながすてきなえがおでくらすことです。

いま、ぼくがすごしているまい日は、とてもへいわでしあわせです。あたりまえのようにまい日ごはんを食べ、学校でべんきょうをして、友だちと元気にあそぶ。とくに日本は、生活するのにふじゆうなく、くらせています。

せんそうをしている国の人たちは、まい日、いつぼくだんがおちてくることにおびえ、しょくじもまんぞくに食べれない、けがのちりょうもしてもらえない、ひもじいおもいをしながら、くらしていることをしりました。

ぼくは、せんそうをたいけんしたことはありません。本をよんで、せんそうのことをすこしだけしりました。せんそうが、なにもかもをうばうということ、せんそうをしてもなんのかいけつにもならない、いのちのおとしあい、かぞくがばらばらになりきずつくこと。せんそうからは、なにも生まれません。かなしみと、にくしみだけがこころのきずとなって、のこるだけです。いえがこわれ、町がめちゃくちゃになり、あれはた土からは、一生しょくぶつは生まれません。おとうさん、おかあさんがしんでしまった子どもは、一人で生きていかなくはいけません。

おなじにんげんなのに、おなじきゆうに生まれるのちなのに、すんでいる場しょによって、こんなにも生かつのちがいがあるのはとてもかなしいです。本をよんでおもいました。せんそうでかなしんでいる人たちにも、あかるいみらいをつくってあげたい。

どうしてせんそうがおこるのかな。ぼくはいますんでいるじぶんのいえや学校や町がめちゃくちゃになり、かぞくがばらばらになることをかんがえるとなみだが出そうになりました。かんがえただけでもおそろしく、かなしいせんそうを、ぼくはしょうらいなくしていきたいです。

いがみあい、たたかいつづけることより、みんなが一つのことを、きょうカして何か作りあげたいです。

ぼくのかよっている学校の生とぜんいんで、一つのうたをうたうと、とても気もちがいいです。2年生のぼくと、6年生のおにいさん、おねえさんの、やさしい声がかさなり合うと、とてもきれいなハーモニーになります。

一つの学校だけで、ぼくのころがかんどうするハーモニーが作れるなら、せかいのみんなと一つのうたをうたうと、どれだけのかんどうがあるんだろう。かんがえただけでわくわくします。うただけで、こんなにしあわせをかんじることができるのだから、大人も子どもももっとアイデアをだしあえば、ぼくが思っているいじょうのことができると思います。

いま、ぼくにせんそうをとめることはできません。いま、ぼくにできることは、もっともっとベンキョウをして、せかいのみんながすみやすいせかい作りをかんがえること。せんそうでかぞくをうしなった子どもたちに、どんなことばをかけてあげたらいいのかな。ぼくだんがおちた土からはどうすれば草や花が育つか。ケガがげんいで、かんせんしょうでくるしんでいる人たちに何ができるかな。しらべること、かんがえることはたくさんあります。

せんそうのないみらいは、ぜったいにくるとしんじています。これいじょう人がきずつけあうことをしても、しあわせにはなれないことを早く気づいてほしいです。花がさくよろこび、おいしいものを食べるよろこび。せかい中のみんなが、まい日えがおですごせるみらい。これがぼくのきぼうのみらいです。

希望の未来をつくる

(原文は英語)

ラッヘル・レンリ・ブルドーム・バン・レイネ (11 歳)

オランダ・ユトレヒト市

リジンスウィード・ダルトン小学校

地球市民の皆さん、

あなた自身のため、世界のために、どのような未来を望んでいますか。

私は、自分が望んでいる未来を知っています。私たちの集合住宅の裏庭に来る鳥たちを見て、自由と幸せに満ちた未来を願うようになりました。鳥のように自由であること、自由に行き来し、餓えや乾きに苦しむこともなく、自由に遊び、自由に学び、自由に笑って自由に泣き、戦争も交通渋滞もなく、そして、何よりも自分らしくいられる自由です。鳥は私に自分が望む未来を教えてくれただけではなく、それを実現する方法も示してくれました。鳥が私に教えてくれたことをお話ししたいと思います。

分かち合うこと：冬になると裏庭の木々や灌木は全部葉を落とします。地面は凍り、鳥たちは懸命に餌を探します。餌となるものはたくさんはありませんが、ヘーゼルナッツの木の下にはたくさんのナッツがありました。カケスとクロウタドリがヘーゼルナッツを一生懸命割ろうとしますができません。キツツキは見事です。ナッツをスモモの木に持って行って、幹と丈夫な枝の間にはさみ、ナッツをまるで木のようにつつきます。固い殻をつついて割り、美味しい実到達します。つついている間に、実のかけらが落ちて、スモモの木の下に集まったクロウタドリやスズメ、アオガラがそのかけらをついばみます。キツツキはそんなことは気にもせず、ナッツが空になるとまた新しいナッツをとりにいきました。私たちのヘーゼルナッツの木には、鳥たちが分かち合うに十分なほど、たわわに実が生っていました。キツツキの知恵と寛大さのおかげで、鳥たちは寒い冬空のもと、ヘーゼルナッツをたっぷりごちそうになれるのです。

思いやること：コマドリが春を告げに訪れた頃、クロウタドリが乾燥した小枝や葉っぱを集めて、隣家のイチイの大木に巣を作りました。春の終わりから夏にかけて、クロウタドリの親子が日中、私たちの裏庭を住まいにします。お父さん鳥とお母さん鳥がひな鳥を連れて毎日やってきました。親鳥は一日中ひなに餌をやり、教え、また守っています。ひな鳥は飛び方を教わり、餌と小石とを見分ける方

法を習います。うろつく猫にとって、鳥たちは面白いおもちゃに見えます。餌を探しているカケスやアメリカカササギにとっては、ひな鳥や小鳥たちはおいしい餌にほかなりません。クロウタドリのお父さんやお母さんは、こうした危険にいつも警戒を怠りません。敵が見えるやいなやサイレンを鳴らします。その音を聞いたひな鳥は急いで隠れ、小鳥たちは飛び去ります。クロウタドリのお父さんやお母さんは恐れを知らず、たとえ自分より何倍も大きい猫であっても、ひな鳥を食べようとしようものなら、容赦ありません。

欲深くならないこと：季節を問わず、ハトの食欲はいつもおう盛で、食べるのをやめることができません。冬には、鳥たちの餌にと私たちが置いている食べ物を全部食べてしまいます。春には、桜の花をついばんでしまいます。夏と秋には、ベリーの木に生る実を食べ尽してしまいます。あまりに太って、停まった木の枝を時に折ってしまうことさえあります。体が重すぎてうまく飛び上がれず、道ではねられることも頻繁です。飛び立つときに十分速く、あるいは十分高く飛ぶことができずに、道行く車をよけられないのです。

無駄をなくして儉約すること：秋には、庭のリンゴの木に美味しそうな真っ赤な実がたくさんあります。カラスがやってきます。カラスはムクドリとは違って、生っているリンゴを全部ついばむことはしません。一番良いものを選んで、できるかぎり長くリンゴが木から落ちないように戦略的に自分の位置どりをします。満腹になると飛び去り、おなかですくと同じリンゴを食べに帰ってくるのです。カラスは儉約家で、一旦選んだリンゴを食べ尽さないかぎり、あるいはそのリンゴが落ちないかぎり、新しいリンゴをついばむことはありません。

幸せでいること：スズメやアオガラはいつの季節も楽しそうです。陽気なさえずりで私たちを楽しませてくれます。ウタツグミの奏でる美しいメロディーはまるで天国からの音楽です。私たちの裏庭に来る鳥はみな、自由で幸せです。雨の時も晴れの時も、寒い時も暖かな時も鳥たちはいつも何かをさえずり、楽しんでいきます。

私が望む未来は、こうした鳥たちを手本にした未来、自由で幸せにあふれる未来です。皆さんも私とこのような未来を分かち合うことができることを願っています。皆にとって世界が平和でありますように。

お金の力を越えて

(原文は英語)

メルシオール・タミシエ＝ファヤール (12 歳)

米国ニューヨーク州

簡単に言えば、経済が人間らしさを破壊しています。破壊といっても、爆弾や手榴弾などではありません。人間性のことです。この世界はお金が基盤にあります。お金がなければ、路頭に迷い、あるいは多くを成し遂げることもできません。こうしたことはすべて何に起因しているのでしょうか。お金です。単純で明快な解決策が僕にあるわけではありませんが、真剣に考えるための種をまくことができ、そのいくつかが育ってくればよいと思います。

こうしてこの作文を書いている今、ギリシャの人たちは独自の通貨やバーター制度を作り出しました。なぜでしょうか。自国の経済に頼ることができなくなったため、自分たちの交換単位を開発したのです。それどころか、もっと透明性が高く、銀行やその他仲介機関に頼らなくていい新しい経済システムを作ってしまった。生活が大変でお金もない状況に陥った人々がお互いに助け合い、創造的な生き方を見つけることを決意したということに共感を覚えます。もちろん、すべての国がギリシャのように新しいシステムを始めたとしたら、結局現在と同じような問題を引き起こす可能性はあります。また、そもそもお金が開発されたのは、取引システムが十分でなかったからです。ではどうしたら良いのでしょうか。僕にはわかりません。でも、今の経済には弱点があることは指摘できます。そのひとつは、いかに不公平かということです。「なんて子どもじみた議論だ。世の中は不公平なものだ」と言われるでしょう。しかし不公平であっても、世の中はチャンスを与えてくれるものです。しかし、今の経済では、チャンスもありません。お金がいかに僕たちの生活の源になっているかという残酷な真実があるだけです。お金は、水や食べ物と同じくらい、もしかするとそれ以上に大切なものになっています。金属片や紙切れ、そして ATM のプラスチックカードに、人間が今やいかに依存しているかを考えてみてください。この先どうなるのでしょうか。全く先はありません。

ネイティブ・アメリカンをはじめ自然とともに暮らしてきた人々のことを考えてみてください。彼らは生と死のバランスを知っていました。自分たちが幸せに暮らすに十分なだけ狩をし、機を織り、ものづくりをしていました。いつも短すぎる休暇を夢見て、毎日オフィスで仕事に明け暮れる必要などありませんでした。いろいろなモノを買い溜めするために、お金をたくさん稼ごうとする必要もありませんでした。ジャン＝ジャック・ルソーなど同じような思想をもった哲学者もいます。ルソーは社会とお金に大変批判的でした。お金は不平等を生み出し、人間性を墮落させると言いました。ルソーは、こうした墮落した状態に異を唱え、「自然状態」を提唱しました。ルソーが自然状態について説

いたとき、僕のネイティブ・アメリカンの例と似た例を挙げています。それは、果物を集めたり、猟をしたり、ほんの少しの農業をして必要なものだけを得る時代のことです。

皆さんがうなずきながらも、次のように考えている姿が目に見えます。「まだまだ幼い夢想家だな。洞窟に住んでいた時代に戻りたいというのか。電気も、iPod も、ネットサーフィンを楽しむコンピュータもないような暮らしを望んでいるのか」と。その気持ちはわかります。でも違うのです。僕が言っているのはそういうことではありません。個人的には田舎が好きですが、皆が狩猟をしたり木の果をとって暮らすような世界が、僕の望んでいる未来ではありません。僕が考えているのは、もっと公正で透明性の高い世界です。

なぜ僕たちは、世界をより透明性が高くより公正なものにできないのでしょうか。ギリシャの例を、ギリシャの人たちがどのようにバーター制度を開発して対処しようとしたかを、もう一度考えてみましょう。また、お金の負の役割を明らかにしたルソーの分析についても考えてみましょう。お金によって不平等がもたらされました。それは、もっとお金を稼ぐために必要もないものを余分に生産することを一部の人に許したからです。そこに銀行が加わって、人々は銀行にお金を預け始め、銀行家とエコノミストが権力を得るようになりました。ギリシャの人たちは、自分たちに権力がなく、操り人形のように銀行家とエコノミストの思いのままにされていると気付きました。そこで彼らは憤慨するのではなく、その代わりに、働いた結果が透明で分かりやすく、食べ物、子守り、授業など自分たちの必要としているものを自由に手に入れられるような生活を自らデザインすることを決めたのです。彼らの方法が最善でも、唯一の方法でもないと思いますが、しかし、違う考え方をしてみることで、物事をより透明にしてみることで、その方法を僕たちに示してくれたのではないのでしょうか。人々が自分の考えを述べることができ、お金が支配者でない世界。それが、僕の望む未来の形です。

希望の未来をつくる

(原文)

木下 陸 (14 歳)

千葉県

市川中学校

未来はわからない。1 時間後、明日、1 年後に何が起こるかなんてわからない。予定があったとしても、それを実行できるかはわからない。何らかの悲劇に巻き込まれるかもしれないし、逆に突然大出世できるかもしれない。そう、未来は良くも悪くも無限の可能性で広がっている。きっと、誰もが「良い未来」を作りたいと思っているだろう。では、その「良い未来」はどうやって作るのだろうか。

「良い未来」という言葉を聞いた時に、僕が思い浮かべた言葉は「平和」や「環境」という言葉であったが、「幸せ」という言葉が「良い未来」すなわち「希望の未来」を作る上で、重要な言葉な気がする。

きっと人によって幸せの定義は違うだろう。誰かにとって幸せは「経済が豊かなこと」かもしれないし、また他の誰かにしてみれば、「治安が良いこと」かもしれない。でも貧しい人や社会的に不利な人のことを考えると、「最低限度の生活を営むことができること」こそが、「幸せ」なのではないだろうか。そんな風に思える。

しかし、それでは未来は現在と何も変わらないのではないだろうか。現在、世界は紛争、貧困、飢餓、差別、環境破壊であふれているとも言える。それらがあると、ある人が幸せだとしても、別な人は幸せじゃないかもしれない。

僕は、「希望の未来」を実現するには、世界の約 70 億人すべての人が「幸せだ」と思える社会を作る必要がある。今、社会や環境に対し、絶望を抱いている人たちがいても、協力して、世界の全員の未来を明るくできる社会。それを実現するには、昔の人が努力で勝ち取ってきた「幸福追求権」をひとりひとりが意識するべきだ。まだ意識することすら許されない国もあるだろう。そういう国は、周りの国と協力して権利を勝ち取る必要がある。でも、誰の血も流してはいけない。よく議論して、世界のすべての人が認め合う。他人を認めるということは、自分の欠点を認めるということになる。そうやってすべての人が欠点に気付いて、核兵器がすべて消え、人種差別、環境問題、不景気などを解決していく。そうすれば「希望の未来」は見えてくるのではないだろうか。

世界にはたくさん言語がある。が、すべての人が「ラララ」とメロディーに沿って歌うことはできる。約 70 億人が「ラララ」と歌って、それをそれぞれ収録して編集する。そして全世界に公開する。インフラが整備されていない場所でも足を運んだり、整備したり、集まって合唱したりして収録する。

それで、「約 70 億人の合唱」を作る。

歌う時、人は何らかの感情を持ち、その思いを込めて歌う。何の意味も持たない「ラララ」というフレーズも、歌になれば、希望に満ちた幸福感、喜び、あるいは絶望で溢れた悲しみ、怒り、憎悪といった意味を持つ。それは人によって違う意味になる。だから「70 億人の合唱」は、ぐちゃぐちゃな歌になるかもしれない。

幸せは響かせ合って増やしていくもので、悲しみは分かち合って減らしていくものだ。だから、ぐちゃぐちゃの歌の中で、幸せは 70 億倍に、悲しみは 70 億分の 1 にできるように聴く。そして、それらも認め合う。これがこの計画の目的だ。この計画は世界がコミュニケーションを出来ないと実現できない。なので、この計画が実現される時、平和な「希望の未来」が実現されていると言える。

人間が生きているなら、悲しみは消えることはない。でも、幸せを全員が感じることはできる。歌と想いを共有できる、幸せな社会と未来。きっと実現できるはずだ。この理想論を叶えるために、僕らは常に世界全員の幸せを考え、幸せを追求していく必要がある。みんなで叶えてみよう。

希望の未来をつくる

(原文)

大貫 絵莉子 (15 歳)

千葉県

市川中学校

今の私達の住む世界は国同士がいがみ合っている。私達地球人はいわば地球におけるパイロットだ。数多くの動物の命を預かっている身である。それなのに戦争をして、お互いのことを傷つける為の道具を作っただけだ。本来、私達は地球全体のことを最優先に考えなければならないはずだ。

そこで私は「どこに行くにもパスポートがいらぬ一つの国のような世界」にしたいと考えた。お互いの言葉が通じ、戦いもなく、平和で治安も良い。一つの国だから損得を考える必要がない。資源を有効に使うことが出来るし、地球環境全体からみた最適な産業を国境に囚われないエリアで行うことが可能だ。環境対策にも資源枯渇問題の対応策にもなる。国家間での紛争に備えた軍備増強は不要だ。そのエネルギーを、もっと建設的な地球全体の利益に向けられるはずだ。

しかし、そんな理想の国がすぐにできるわけがない。その大きな理由の一つに「心の壁」がある。これは人々の心の中にある、外国人への差別意識だ。人の意識は法律で縛られたからからといって、そう簡単に変わるものではない。

私は「心の壁」を取り払うには、教育が必要だと思う。差別意識は、親の話や態度から子供に自然と伝わってってしまうものである。差別意識が芽生える前の幼い時期から教育対策をすべきだ。方法として教育現場を地球全体の人の割合で構成してはどうだろうか。1 クラス 40 人で計算すると、中国人 8 人、インド人 7 人、アメリカ人 2 人、インドネシア人 1 人、日本人は 0.8 人。先生の人種配分も同様だ。ここで地球人としての倫理観、価値観、地球運営に必要な知識を教える。こんなクラスで学んでいけば、他国の人に違和感を覚えないから差別意識も生まれないし、自分と違う国の文化を容易に受け入れられるグローバルな人間が育つはずだ。

また、大人も「地球人」意識への変革が必要だ。現代人が自国の利益しか考えられないでいるのは、地球が唯一無二であること、人間は地球全ての生命と共存せねば生きられないことを、実感できていない人が多すぎるからではないだろうか。既に大人である人間の意識は、そう簡単に変えられない。しかし、それでも「地球人」になる為の知識を全人類は学ぶべきだと思う。地球の現状、地球人としてすべきことを人類全員が学べば、意識改革できるのではないか。そのうちに、地球全体の利益を最優先することが当たり前になる日が来るだろう。

戦国時代の日本では、数多くの小国が林立し、互いに戦をしては領土を奪い合っていた。しかし、

国が統一された現在、自分は武蔵だ、下総の国の人間だ、などと考えて生活している人はいない。各地方独特の文化は残したまま、日本人としての帰属意識を共有している。

今の世界は、日本の戦国時代のような状態だ。それぞれの国が自分の利益についていがみ合っている。これからは地球全体が統一され、地球人としての共通意識を持つ番だ。現在の日本に地方色があるのと同様、地球人となったからといって、その国の文化が失われるわけではないだろう。それぞれの風習や文化を残したままでも、世界中の人々の意識は一つになれると思う。

地球は宇宙の中のちっぽけな一つの星にすぎない。その中で争っているなんて馬鹿げている。

今までの人間の歴史を振り返ると、我々の「世界」への認識はムラから宇宙まで広がってきた。私達の帰属意識も、家族から国家にとどまるのではなく「地球」にまで広がるべきだ。これからは地球対宇宙で物事を考えるのが当たり前の時代になるかも知れない。私達は地球という一つの乗り物にのっている乗組員なのだ。だからこそ「地球人」という共通意識の元、一丸となって協力することが必要不可欠だ。それこそが希望の未来につながる、と私は考える。

ホームとしての社会の実現－私のホームレス支援活動から－

(原文)

竹内 杏子 (17 歳)

宮城県

尚綱学院高等学校

私たちが生きている社会には、様々な課題が存在しています。そうした社会の本当の姿は、私たちが普段は見過ごしてしまうような疑問に立ち止まることで、より見えてくるのではないのでしょうか。それを無視して「希望の未来」を語ることはできないと思います。

私は幼少期から、ホームレス支援団体の炊き出しの活動に参加してきました。温かい食事を路上生活の方々に提供することには、彼らに「生きる希望」を繋いでほしいという願いが込められています。一人一人に「お元気ですか」と声掛けをし、「あなたは独りではないよ」というメッセージを送っています。

現在、私の住む仙台市には約 120 人のホームレスがいとされています。彼らは日々、凍死や孤独死、また若者による襲撃などの危険にさらされています。彼らがホームレスになったのは、不況により職を失ったり、過酷な労働条件の下で体を壊したりしたためです。援助してくれる身近な人がいなければ、いつか家賃を払えなくなり、路上に出るしかありません。生活困窮の中で多重債務を抱えたり、自暴自棄になって依存症に陥ったりするケースも少なくありません。彼らに共通しているのは、抛りどころとする場所や人間関係を失っているということ、つまり、文字通り「ホーム（居場所）レス（失う）」状態なのです。

しかし、「ホームレス」が存在する社会についてのこうした問題意識を、同世代の友人と共有することは容易ではありませんでした。「汚い」「怖い」「好きでやっている」「自分とは関係ない」というような偏見や無関心が想像以上に根強いことに気づいたからです。また、ホームレスになったのは「本人が怠けたから」「社会に適應できなかったから」という自己責任論も聞こえました。どうすれば、現代社会が抱えるこの問題に向き合ってもらえるのかを、悶々と考える日々でした。

そんな中、3 月 11 日の東日本大震災は起こりました。私たちは今までにない激しい揺れを経験し、食料やライフラインを一瞬にして断たれました。私が関わっていたホームレス支援団体では、すぐに地域の人々への炊き出しが始まりました。私も学校が休校になったので活動に参加しました。余震は続き、ボランティアもみんな被災者、あるのは限られた食料と燃料という状況の中、事務所周辺と市内の公園、そして津波被災地の避難所において、1 ヶ月で延べ 4000 人へ、約 10,000 万食を提供することができました。その時、ボランティアに駆けつけてくれたのは、それまで支援される側だったホ

ホームレスの方々だったのです。心配された支援物資は国内外から続々と届き、不足することはありませんでした。

私は、この震災体験を通して、過酷な現実の中でも、人と人が支えあい励ましあうことが生きる希望になることを知りました。そこでは、支援する側・される側という壁が取り払われ、同じ社会の一員として、弱さや欠乏を担い合う関係が存在していました。私が思い描いた「共に生きる」社会が、ひと時ではありましたが実現していました。

私はこの感動を多くの人に伝えていくことが、ホームレスへの偏見や無関心を取り去り、他者と向き合い、共により良い社会を築く仲間として歩み出すことに繋がると思いました。私は機会を見つけては、校内での発表や他校生との研究会・交流会などで発信しています。この試みは今後も継続していきたいです。

「ホームレス」とは私たちにとって決して遠い存在ではありません。「ホームレス問題」とは、現代社会が抱える、人と人との関係性の喪失の問題にほかならないからです。ホームレスの問題の解決のためには、「ホームとしての社会」を私たち自身の手で造り出さなくてははいけないのです。誰もが安心して暮らせ、何度でもやり直しのできる社会、切り捨てられたり無視されたりしない社会、一人一人が自分らしく生きられる社会が実現する未来を、一緒に拓いていきましょう。

国のない世界

(原文は英語)

アンディタ・フィルセリー・ウタミ (20歳)

インドネシア・西ジャワ州

インドネシア大学

人の意見に公然と異議は唱えても、必ずしも尊重はしない。そんな世の中にあっては、誰もがあらゆることに反対しているように見える。環境保護主義者は産業の拡大を拒み、自由主義者は統制市場に反対し、テクノクラシー(技術主義)支持者は何にも増して継続的發展を選ぶ。彼らは自分が望む未来について、それぞれ理想的な絵を心の中に描いていて、表面的な違いはあっても、誰もがビジョンの実現を献身的に追求している点では、同じなのである。

私もまた、完璧な世界がどのようなものであるべきか、自分なりの強い望みを持っている。

まず、権力というものは腐敗しがちである。社会が、一握りの選ばれた人々に強大な支配力を「自発的に」ゆだねるといふ社会契約のあり方は、本質的に不正につながりやすい。その結果として、世界の至る所で「ナショナリズム」と呼ばれる、目に見えない大義のために兵士が罪のない人々を殺害したり、本来なら貧しい人のために使われるべき国家予算が誤った使われ方をしたり、単なる政府当局者の被害妄想によって、様々な手段で言論の自由が制限されたりしている。最も権力のある者は、国際平和の実現に向けて懸命に努力していると主張するが、皮肉にもその手段は銃と手榴弾のみである。

ありがたいことは、こういった状態は必然的なものではなく、4世紀近く前にヨーロッパの皇帝や王がつくり出した概念の産物に過ぎないということである。他の発明と同様に、「国民国家」にも有効期限があると私は考える。今日、この変化の過程は、グローバル化とテクノロジーによってさらに加速され、世界の市民社会はかつてないほど力強くなっている。ここ数十年、国境を越えた連帯は、世界の指導者が下す決定を変えることができるほどに強力なものになり得ることが証明されてきた。したがって、100年以内に、たゆまぬ努力を続け、声をあげる民衆のネットワークが、国家の支配に取って代わることは可能である。そのときには、現行制度を徹底的に見直し、世の中の基盤そのものを作り直すこともできるはずだ。何故なら人類には、今とはまったく異なる、より良い世界が相応しいからだ。

そのような世界で話される言葉は、調和の言語だけである。「国籍」という言葉が消えるのと同時に、「性別」、「人種」、「階級」、「民族性」も無くなってゆく。こうした言葉はどの言語の辞書にも載らなくなり、平等と正義を表わす語彙がそれらに取って代わる。その結果、人間同士の誤解も

随分なくなる。

そのような世界で必要なビザは、出生証明書だけである。生まれてくる子どもはみな世界市民となり、やがて、生まれに関係なく自分が最も必要とされている地域に住居を定めることができるようになる。人生の旅路を経験することを、一方的な政治的理由から禁ずることは誰もできなくなるのだ。

そのような世界で有効な貨幣は、愛の通貨だけである。もはや権限は取引されるものではなく、人々に平等に分け与えられるだろう。「エンパワメント(権限付与)」が次世代の文明の主要な用語になるのだ。社会の主流から取り残された人々を置き去りにすることは、私たち自身の破滅的な損失になるということに気付くからである。経済は強制された平等主義の下で営まれるのではなく、少なくとも、他人に負担をかけないという本質的な意識の上に構築され、営まれる。

そのような世界で広まっている宗教は、人道だけである。人々には、それぞれ信仰する神や儀式がそのままあってよいが、互いをひとつの大きな家族と見なす。信仰の多様性を保護する一方で、人間の解釈する聖典よりも良心がものをいう。そして、人類は、かつてないほど命を大切にできるようになる。憎悪や戦争は永遠に博物館に封じ込められ、そこを訪れる人々は、かつて人間が犯した恐ろしい歴史を思い出し、二度と繰り返してはならないと思いを深めるのだ。

そのような世界には、国家というものがない。私とあなた、そしてかつて政府や古い世代が押し付けたアイデンティティを捨て去った何十億もの人々がいるだけである。それぞれの違いを感謝すべきものとし、公平な正義こそが譲れない原則であると信じる人々が住む、平和な地球があるだけなのだ。

「健全な」アフリカ、それは私の夢

(原文は英語)

シャドラック・オセイ・フリムポン (20 歳)

ガーナ<米国バージニア州在住>

ペンシルバニア大学

「生命維持に不可欠な臓器は機能を停止してしまいましたが、今のところ鎮静状態です。彼はなぜ、そんなにお酒を飲んだのでしょうか？」と、医師は理由を問いただした。その言葉を聞きながら、私は母の顔から血の気が引いていくのに気付いた。それは、母の唯一の生きている弟、つまり私の叔父についての恐ろしい宣告だった。

診察室の向こう側の窓にかかったブラインドの間から、叔父のウィリアムが見えた。叔父は家のベンチブランコで寝ているときと同じように、ベッドで上半身を起こした形で横になっていた。昏睡状態になって 2 週目で、それはおそらく、グラスゴー昏睡尺度で 7 点をスコアする状態だった。私の心は張り裂けた。私と一緒によく魚釣りに行った叔父さん、農場からの帰り道に、いつも私にカニを捕まえてくれたあの逞しいアングル・ウィリーはどこへ行ってしまったのか。貧しくて手術費が払えないのなら、病状が一日ごとに悪化するのを、なすすべもなく見ていることしかできないと医師から伝えられたとき、私は涙を抑えることができなかった。叔父は酒飲みで、それが原因で命にかかわる脳の病気にかかり、何ヶ月にもわたって治療を受けた。でも残念ながら、叔父は病気との闘いに敗れ、2000 年 12 月 23 日の日暮れ時に亡くなった。叔父が亡くなったのは悲痛な出来事だったが、過度に飲酒することの危険と、その悲惨な神経学的影響について人にアドバイスするたびに、私は叔父の存在を感じる。これは健康管理に関する教訓であり、自分でも実践するようにしている。

私はここ 3 ヶ月ほどマシュー・ウォーカー・クリニックでボランティアとして働いているが、ナッシュビルに住んでいる経済的に恵まれない人を対象に、クリニックが良質の医療を無料で提供していることを知ってすばらしいと思った。残念ながら、ガーナにそのような医療センターはなく、医療の手が行き届かない層のニーズに対応できていないというのが認めざるを得ない現実である。

亡くなった叔父のように、脳疾患で何千もの命が毎年失われている。Korle-Bu 神経科学財団 (KBNF) がガーナに神経科学センターを作ろうと取り組んでいることは賞賛に値するが、センターひとつだけでは、3 千万を越える人口の神経系に係るニーズに対応することはできない。神経外科医が 4 人、神経科医が 2 人しかいないガーナで、何千人もの患者がどれくらい迅速に治療を受けることができるのか？ 地方に住んでいる人に治療を受けるお金があったとしても、どれくらい簡単にセンターにアクセスできるのか？ こういった問題に対する答えを必死に模索していた私は、ガーナ、

そしてアフリカ全土で、医療に対する資金的な障壁を取り除くことに尽力しようと決意した。

私はこの決意を胸に、アフリカ神経科学イニシアチブ（ANI）を設立した。米国に留学している他のアフリカ人学生と協力して、ANI は数ヶ所の大学で募金活動を実施し、ガーナの主な病院に入院している神経疾患患者に資金や物資の支援をしている。長期的には、KBNF のような組織とパートナーシップを築き、サハラ以南のアフリカで初めての神経学研究所を設立する手助けをすることが私たちの目標である。さらに、ANI は将来的に小規模金融組織と組んで、低所得の患者に低金利ローンを提供するという計画も持っている。そうすれば、すべてではないにしても、アフリカの家庭の多くが医療を受けられるようになると考えている。そうすれば、政府は貧困の削減から神経科学センターの建設へと目を向けられるようになり、それぞれの国で緊急に必要なとされている神経科医や神経外科医を育成するためのトレーニングを実施できるようになる。

これを書いている間にも、私たちはフェイスブックやツイッターなどのソーシャルネットワークを活用して、Korle-Bu 神経科学財団が参加している競争入札について広報を行っている。これは、アフリカ、特にガーナでの神経外科向上のための資金を得るための入札である。入札に勝てば、テレシミュレーションを使って、遠く離れた二つの NeuroTouch シミュレーターをスカイプでつなぐ計画だ。そうすれば、ガーナの医療従事者が経験豊富なカナダの外科医から、対話形式でトレーニングを受けることができるようになる。約 1,200 万人に対して神経科医がわずか 1 人、約 270 万人に対して神経外科医がわずか 1 人、そして医療機器と訓練された人材が徹底的に不足している国において、このイニシアチブは脳疾患治療の現状改善に役立つと確信している。

悲しい現実として、アフリカ諸国や国際機関は、脳疾患治療の問題に対して、あまり注意を向けてこなかった。そのため、今年 3 月、ビル・クリントン元大統領のグローバル・イニシアチブ（CGI）プログラムに選ばれ、サハラ以南のアフリカにおける神経科学の現状を伝える活動に携わることになったのは、私にとって大きな喜びだった。私は意欲的な神経外科医として、すべての人々が脳疾患治療を受けることができるアフリカを心に描き、いつの日か、重病患者の顔に笑顔を取り戻し、彼らが以前の生活に戻れるよう手助けをしたいと思っている。いつも叔父のことを心に留め、叔父を死に至らしめたような病気から人々が回復するのを手伝っていきたいと思っている。

希望の施設

(原文)

野木 美由紀 (20 歳)

宮城県

仙台大学

私には障害を持った二人の兄がいる。長男は、軽度の知的障害であり、次男は知的障害と自閉症の重複障害である。そんな兄は、日常生活の中で、偏見や差別をされたり、はじめから拒絶されたりしていた。私自身、小学生のとき、兄のことでいじめを受けた経験がある。こうした個人的事情もあり、私は、大学で障害者の教育や自立支援を専攻することにした。その学習のなかから今の障害者施設のあり方とともに、私の夢の施設を考え始めた。

私の念頭にあるのは、特に知的障害ならびに重複障害者のための施設である。とくに後者の場合、受け入れる施設が少ないからである。さらに、現在の障害者支援施設は、自立を促す就労支援センター、療育センター、親元を離れて自立を目指すグループホーム、障害者のデイサービスがそれぞれ別個にある。しかし、私は、その四者が統合した施設を考えている。どんな障害を持っていても、障害者の自立をサポートし、家族もサポートできる。また、偏見による差別をなくす為に、地域住民と共に生きていくことができる。そんな施設にしたい。そうした、施設の中で次の三つの活動が出来るようになること、それが、私の夢であり、実現したい「希望の施設」である。

第一に、障害を持った人がそれぞれ特性を生かすことができる施設であることが必要である。それぞれの障害の特性によってパニックをおこしたり、特定の介助が必要だったりする。そうした介助は、手間と時間が掛かる。だから次男のように受け入れ拒否に遭うこともある。どんな障害者でも受け入れを拒否せず、それぞれの障害の特性に合わせた支援を行うことは、難しいであろう。しかしそれを実現することがどうしても必要だ。

第二に、より多くの人々の障害に対する理解を高めるために、たくさんの方が気軽に触れ合う場所を提供できる施設である。健常者はあまりにも障害者に対して関心がない。それは、障害に関して、小中高の教育の中でほとんど取り上げられていないということも理由であろう。そのため、ふれあいと勉強の場を施設のなかで提供したい。興味のない人も気軽に立ち寄ってもらえるイベントを企画していきたい。

第三に、障害者も家族も支援できる施設である。ひとつには、特に重い障害を持った人、重複障害者への自立に向けた活動が、特別支援学校の教育だけでは不十分な部分もある。障害者は、上にのべたように、それぞれ特性を持つが、それは隠れた才能を持っているということにもつながる。現在は、

それらを開花させているとは思われない。家族に対しては、福祉サービスの利用について周知したい。これまで、家族への説明が十分にされてこず、福祉サービスの利用が法的に可能でありながら、あまり利用されていないという実態があるからである。そのためにも、国にもっと利用しやすいサービスを提案してもらいたいし、わかりやすい説明の出来る人材を育成することも必要である。このようにして、誰にも相談することが出来ない悩みや疑問を話せる場を作りたい。

まだ抽象的な理念にとどまっているし、それを具体化することは困難であることは十分にわかっている。しかし、何年掛かるか分からないが、実現を目指し、努力していきたい。その為にも、大学卒業後、特別支援学校や障害者施設で実務経験を積みながら、社会福祉士などの資格取得を目指していくつもりである。国に逆らっても、必要と思うことを誰かが実現しなければ、障害者の未来や幸せを創り上げていくことは難しい。だから、私が考える希望の施設を必ず実現し、障害者とともに健常者を巻き込んで、みんなが幸せになれるような施設を作りたいのである。どんな障害を持っていても、差別したり拒否したりすることのない理解ある健常者と共に生き、障害者がそれぞれに応じて自立を目指すこと、それが、みんなが幸せな生活を送ることのできる社会を創り上げることに通じるのだと信じている。

教育を受けた世代に対する大きな期待

(原文は英語)

アニスチャ・ラクマワティ (23 歳)

インドネシア・西ジャワ州

教育がなかったら、私たちはどうなるでしょう。教育なしで、今、感じていることを感じる事ができるでしょうか。この現代社会を生き抜く上で、教育は重要な役割を果たしています。知識の力があれば、これまで世界に遅れをとっていた国も力強い国になることができますが、知識をないがしろにすると、国は衰退するのを待つだけとなってしまいます。そのような事実は過去から学ぶことができます。ローマの栄枯盛衰も然り、イスラム文明も然り。教育により、彼らは高度な文明を持つ大国を作りました。世界中の人々が彼らの進んだ社会に目を見張り、いつか自分たちも彼らのようになりたいと願うばかりでした。しかし、いったん教育をないがしろにすると、その先にあるのは破滅でした。だからこそ、社会の繁栄のために教育を駆使しなければなりません。そうすれば、「知識は力なり」とフランシス・ベーコンが言ったように、人類のより良い未来のために様々なものを発明し、開発することができるのです。

私は教師なので、教育というものに非常に興味がありますが、特に私の国では教育を受けることがそう簡単ではないことに憂慮しています。教育は贅沢品のようなものです。標準的な教育ですら、受けるには多額のお金を持っていなければならず、お金がない人は、払える分だけの教育しか受けることができません。一銭もない生徒はどうでしょう。彼らは、壊れた屋根の下の狭く汚れた部屋やトンネルの中で勉強している現状です。ときには、クラスが黒板だけで隔てられているため、隣のクラスの話し声が筒抜けになることもあります。さらに悪いことに、親が授業料を払えないため、幼い頃に学校をやめなければならない子どもも大勢います。その結果、自分でお金を稼がなければならず、物乞いをするようになります。そのような経済的制約の中で、どうすれば大きな夢を持てと、彼らに言うことができるでしょう。

私は、自分の夢を実現する方法の一つとして、文部大臣になりたいと思っています。国の予算をもっと教育に割り当て、授業料を国中の誰もが払える程度にし、必要な設備を整え、さらに優秀な生徒には奨学金を全面的に支給することで、生徒間の競争をあおりたいと考えています。家庭環境にかかわらず、少なくとも大学を卒業するまで、すべての人が最高の教育を平等に受けられるようにしたいと心から願っています。なぜならば、教育を受けた人々は国の発展に大きく貢献できるので、その授業料を負担することで、彼らを活用できるのは、親ではなく国であると思うからです。

ただし、国が彼らを援助したように、彼らも社会に貢献することによって、国を助けていかなけれ

ばなりません。大学卒業生全員が、就職する前に少なくとも 2 年間にわたって社会奉仕をしなければならぬと考えます。国を守るために、徴兵制による兵役を国民に義務付けている国がありますが、私は同じことを、教育を通じて行いたいと思います。国が彼らの生活費の面倒をみる一方で、彼らは未だ貧困線以下の生活を送り、読み書きのできない人が多い地域の子どもの教育を施し、自治体と協力して地域の発展に貢献するという社会奉仕制度を考えています。このような社会奉仕を通じて、彼らは少なくとも二つのことを学びます。第一に、生徒たちを指導し管理するので、人を管理することの経験になります。第二に、貧しい人々の生活を直に見て感じる機会となるので、貧しい人々を軽視したり操ったりするのではなく、彼らに共感し尊重するようになります。そうなれば、新しい世代の間で腐敗が減り、国民を育てることで国を発展させるという意識が高まることでしょう。

さらに大学の卒業生がその知識を役立て、地方自治体に協力して町の発展に貢献すれば、人々もそのメリットを感じ、教育を受けて自分の町の発展に寄与することがいかに素晴らしいことか実感するはずで、それだけでなく、大学の卒業生という模範を見ることで、未来をつかもうと夢を大きく持つようになります。どんな仕事でも実際に模範を見るまでは、それがとても魅力的で将来性のある仕事だということがわからないものです。

それが未来へ向けての私の夢です。世界全体に貢献できることではありませんが、私が自分の国に願うことです。私の世界はここで始まり、ここを中心に回っているので、自国の発展なくしては、世界が私をどこへ導くのか、未来が見えないからです。いつの日か、私の国も世界中で尊敬され、影響力を持ち、力のある国の一つになって欲しいと思っています。そして、それは教育という基本的なことからはじめることができると思っています。